

バルセロナ雑感

栗原尚子

近年、アントニオ・ガウディ（1852-1920）が日本においても注目を集めている。彼の代表的な建築物であるバルセロナのサグラダ・ファミリア贖罪聖堂が、某洋酒メーカーのコマーシャルに登場したのもその表厚的な一面であろう。日本のガウディ研究の端緒は、今井兼次氏によって拓かれ、その後、東野芳明、栗田勇、栗津潔等の諸氏により、彼の造り出す「世界」について研究が積み重ねられてきている。

私自身、ガウディの作品をすべて目にしたわけではない。バルセロナを初めて訪れた1977年秋、これだけは目にしておこうと出かけたが、サグラダ・ファミリア贖罪聖堂であった。「出会い」から何を得るのか、私自身がためされる瞬間であり、この緊張感と期待感にみちて前に立ったとき、私を襲ったのは、困惑でしかなかった。何をどうみるのか糸口が全くない自分に、ただ視界に入ってくる建築の「かたまり」にたちつくすだけだったのである。今のところ手に負えない「世界」との 遇であった。ガウディの作品が、「合理主義的傾向へのレトリックの虜となりつつある建築やデザインの世界にとって、あらゆる問いを発する根源であり」、生物学的原理をとりいれた表現世界は「人間主体に溶くかかわる空間の構造」であることを、言葉として理解できたのは、後に、彼に関する書物を通じてである。現代建築のかかえる問題に関して、経済効率と機能主義によって造りだされる建築物に異和感を感ずる程度の知識し

か持ち合わせていない私にもっと、関心のあるのは、ガウディが生きた時間と空間である。今回、彼に関する文献を少しづつ読みはじめて、彼が「カタルーニャ探訪協会」にかかわっていたことを知った。昨年、スペインにおける近代地理学の受容についての一端を明らかにすべく、マドリッド地理学協会に関して論文を書いたとき、他の地域における同様の問題として気になっていたのがバルセロナであり、その中でも注目されたのが、この「カタルーニャ探訪協会」であったのである。カタルーニャの再発見をフィールド調査を通じて行うという目的をもったものであり、それは、当時のカタルーニャにおける Regionalism の運動の一貫をなすものであった。カタルーニャの歴史に、自然に、カタルーニャの地域社会の形成の根源を求めるのが、単に狭い「地域主体」にすることなく、当時スペイン社会に侵透しつつあった「近代」に対置しうるものをさぐりだす可能性をもつものであったのかどうか、あるいはバルセロナという「地域」のみに固有な土着的な倒面しかもちえないものであったのか最も関心のあるところである。ガウディの「世界」はこの一つの手がかりとなるかも知れない。初めて、ガウディに 遇した時、バルセロナは、フランコ体制終焉後、自治を求める地域広域にわきかえっていた。赤と黄色の旗が家々の窓を飾っていたのは、何か象徴的であった。

ランドサットマップの製作について

渡辺真紀子

縁あって、10万分の1ランドサットマップの製作に参画することになった。ランドサット5号から送られてくる TM データにもとづいて、110km×80kmの広域がメルカトル図法に展開、図化され

ている。図幅は現在「東京とその周辺」、「阿蘇山とその周辺」、「伊豆富士及箱根」、「大阪とその周辺」の4種類が発行されており¹⁾、僭越ながらこれらの“地理案内”と題する解説を担当してい